

第4章

SSH生徒研究員制 保健プロジェクト —科学技術の効用—

佐藤 喜世恵

(1)目標

保健医療の分野でも科学技術の進歩はめまぐるしく、AED（自動体外式除細動器）が普及してきたこともそのひとつである。そこで、心肺蘇生法の手順、AEDの使用意義などを理解させ、適切に応急手当ができるように実習させる。そのことにより、生徒自身が「命を救う」科学技術の効用を実感し、実践できる地球市民の構成員であることを自覚させる。そして、保健医療科学技術の進歩により、「どのように生きるか」ということについて、多様な選択が可能になり、選択する力を養うことの重要性を理解させる。また、医療サービスの格差の広がりについても学習を深め、科学技術の効用を生徒に十分理解させた上で、国際社会で健康に生きていく行動力を身に付けることができるようになることを目標とした。

(2)学習方法

名古屋市消防局普通救命講習を高校の授業時間に合わせアレンジし、生徒全員が実習できる心肺蘇生法・AEDの実技授業や、実技テスト、記述式テストなどを実施した。それから、科学技術の進歩による高度先進医療の効用、命の選択を迫られる生き方、世界の保健医療の現状、医療サービスの格差について、ワークショップ形式で授業を進めた。ブレインストーミング、派生図、KJ法、優先順位付け、フォトランゲージ、行動計画などの分析的手法で、ディスカッションをして、多様な形の授業で学習内容を深めていった。

(3)実践内容

1. 応急手当の意義
2. 心肺蘇生法の手順
3. AEDの原理、使用方法
4. 実習
5. 実技テスト
6. 記述テスト
7. 高度先進医療・科学技術の効用
8. 世界の保健医療の現状
9. 世界の医療サービスの格差
10. まとめ

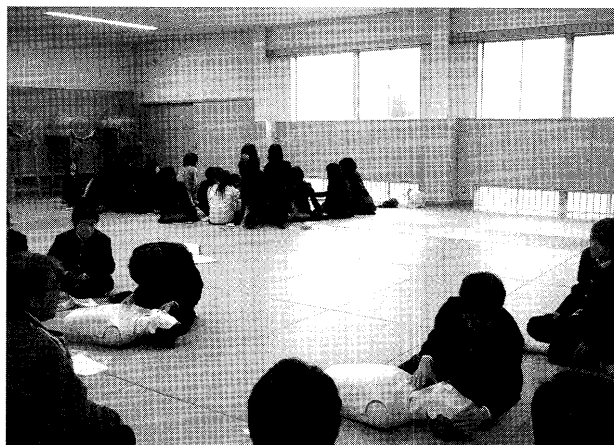


写真1：心肺蘇生法実技風景

(4)成果と課題

心肺蘇生法の実技については、名古屋市の普通救命講習の修了証授与のチャンスが与えられること、そして何より、生徒全員がじっくりと実技練習ができること、実技テストを受けること、以上により、技術習得へのより高い動機づけを持たせることができた。時間不足からビデオだけの視聴や、代表者だけの実演になってしまうという問題は、以前から解決できてはいたが今回練習機材が充実でき、複数の教員によるチームティーチングで生徒6～7人に練習用人形1体という教育環境を整備できたところは大きい。(写真1)単独の教員で、修了証もなく、生徒20人に練習用人形1体の環境の中でおこなった以前の実技テストより、平均点は上昇している。さらに、成果と考えられるところは、低得点者がいなくなったことである。苦手意識を持っていた生徒に対してマンツーマンの指導の時間が長く取れ、少人数で生徒同士の学びあいも進みやすかったため、どの生徒も、心肺蘇生法、AEDの実技をマスターすることができた。

また、ワークショップ形式で、生徒の積極的な参加を促し、多様な分析的手法を用いたことは、効果的であった。生徒の成果物(写真2・3)を見ても分かるとおり、多様な視点から全体を捉えたり、意見の共通点を見つけたり、異なる視点から捉えなおしたり、具体的な行動のイメージを持つことができた。

今後の課題として、生徒自身がイメージしたものの方向性を確認していく力を養い、自己評価できる視点を持

つようにするために、どのようなアプローチが効果的な
のかを研究していく必要がある。

(文責：佐藤喜世恵)



写真 2：生徒の成果物

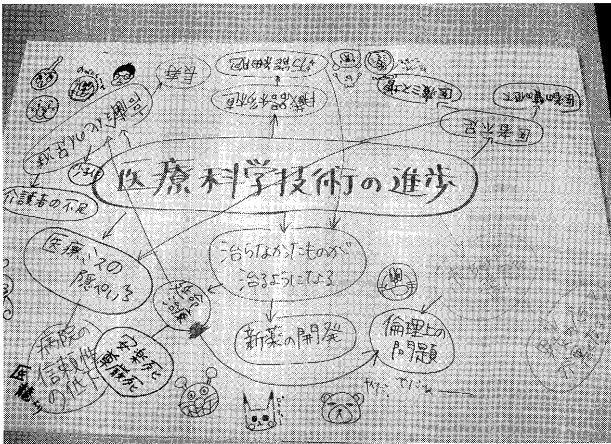


写真 3：生徒の成果物